

宝生会 月並能

二〇一九年十月十三日（日）

開演 十四時
開場 十三時十五分
於 宝生能樂堂

シテ宝生 和英

六 浦

ワキ殿田 謙吉

大鼓 柿原 弘和 太鼓 小寺真佐人
小鼓 幸 信吾 笛 藤田 次郎

ワキツレ 館田 善博

〃 梅村 昌功

間 善竹大二郎

後見

高橋 章
田崎 隆三
小倉健太郎

地謡

和久莊太郎 金森 秀祥
小倉伸二郎 大坪喜美雄
大友 順 武田 孝史
野月 聡 辰巳満次郎

15:20

萩 大名

善竹 十郎

大藏 教義
大藏吉次郎

へ 休 憩 十 五 分 へ

子方水上 嘉

シテ今井 泰行

自然居士

ワキ宝生 欣哉

大鼓 國川 純
小鼓 鶴澤洋太郎 笛 槻宅 聡

ワキツレ 野口 琢弘

間 善竹富太郎

後見

中村孝太郎
佐野 由於
高橋 憲正

地謡

澤田 宏司 金井 雄資
小林 晋也 當山 孝道
水上 優 登坂 武雄
山内 崇生 佐野 登

終演予定 十七時十五分頃

演 目 の 解 説

能「六浦」（むつら）

都の僧が東国行脚の途中、六浦の称名寺に立ち寄ります。折しも見事に紅葉する木々を見て、都にもこれ程の紅葉は無からうと感心しますが、中に一本だけ紅葉してない木を見つけ不審に思います。そこへ女が現れ、その訳を語ります。昔、冷泉為相卿という方がこの寺に立ち寄ったとき、たった一本だけ紅葉していた木に和歌を手向け、その徳により以後紅葉する事がなくなつたという。実は女はその楓の精で、夜になり月光の中に再び現れて、舞を舞います。

狂言「萩大名」（はぎだいみょう）

訴訟事のため永らく在京していた大名は、都の名残に遊山に出掛けようと太郎冠者に相談します。太郎冠者は、宮城野の萩が盛りの庭を見物する事を提案しますが、その庭の持ち主は大の歌好きで、必ず見物客に歌を所望すると云います。歌を詠む嗜みのない大名に、太郎冠者は一計を案じ、和歌のカニンング法を伝授しますが・・・。
無知な大名を風刺にした面白い演目です。
「七重八重九重とこそ思いしに十重咲き出る萩の花かな」

能「自然居士」（じねんこじ）

東山雲居寺の若き僧自然居士は、説法願の日を迎えていた。そこへ幼い少女が小袖を手に、両親の追善の為に諷誦文を捧げた。その志に皆が涙するところに、東国の人買いが乱入して少女を連れ去ってしまう。居士は小袖を肩に人買いを追いつき、大津の岸で出港寸前の船に追いつきます。小袖を船に投げ入れ、少女を返せという居士に閉口した人買いは、舞を舞わせたり、船の起こりを語らせたり、散々芸を尽くさせた上で、烏帽子を渡して鞆鼓を所望します。居士は烏帽子を着け鞆鼓を舞うと、少女を伴い都へ帰って行きます。

次 回 予 告

二〇一九年十一月十日（日）
十四時始

実 盛 亀 井 保 雄

蟬 丸 武 田 孝 史

補助金 補助費 振興費 興業
文化庁文化芸術振興
（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会

